

日本語学習者の予測能力と文法知識 —学習レベルに現れた特徴と日本語習得過程—

原 やす江

1. はじめに

日本語母語話者は日本語の文の最初の数語を聞いただけで驚くほど正確に文の続きを予測することができる。これは寺村(1987)がある実験によって得た結果である。では、日本語学習者の場合はどうか。上級学習者に対しては既に同様の調査が行われている(市川 1993)が、他の学習レベルではどうなのか。その点に興味を抱いた。学習者は習得した語彙や文法を用いて、自分なりに書きたい文は書けるだろう。だが、与えられた語彙の連なりからあり得る文の構造や意味内容を予測して、文法的に正しく、意味においても日本語らしい文を産出すること、いわば逆向きの思考は難しいだろうということは想像に難くない。また、単に文法知識があるからといって、与えられた語彙から母語話者が考えそうな意味内容の文を予測して作成できるというものではなく、どれだけ多くの自然な日本語文に触れてきたかということにも関わってくる。そこには日本語の学習段階の特徴、日本語習得過程が浮き彫りになるのではないかと考えた。

本稿の目的は、母語話者の予測と比較しながら学習者の予測能力の様相を記述し、学習レベル別の特徴を明らかにすること、そして予測をする際に最も重要な手がかりとなる文法知識の習得過程を明らかにすることにある。

本稿では、まずこれまでの予測文法研究に触れたあと、本調査の概要説明、調査結果の記述、そして最後に学習者の予測文法能力の特徴をまとめる。また、各レベルに現れた特徴をレベル判定などに役立てる可能性も示唆した。

2. 先行研究

寺村(1987)がこの予測能力を調査しようと思った理由はいくつかある。一つは、よく「日本語では述語が最後に来るから、あるいは肯定否定の形が最後に来るから、最後まで聞かなければ分からない」と言われることに対して疑問を持っていたこと、また外国語に慣れないうちに聴き取りにおいて誰もが感じる緊張感がどこから来るのかという疑問をもったことであった。外国語学習者は「完結した形で与えられた文は理解できても、『あたまから』『流れに沿って』理解していく力が充分でないから」緊張するのではないかと、そしてその力とは、「聴いた瞬間にその聴いた部分を理解するだけでなく、その後どういう語の連なりが来るかをも瞬間に予測する能力を含んでいる」と考えた。そして、日本人に対して文の続きを予測させるという実験を試みた結果、「驚くほどの正確さで、しかもかなり先まで現れそうな語(の連なり)を予知する」ことがわかった。

この寺村の行った調査と同じ方法で上級日本語学習者に対して予測能力を調査したのが市川(1993)である。市川の調査目的は、「外国人の文法知識に基づく予測の仕方が日本人とどのように異なり、どのような問題点を持つか、また、外国人の予測能力と文法力との関連について考え、彼らに予測能力をつけるためには、

どのような文法力が必要となるかを探る」ことである。調査の結果、上級学習者は「述語が同一の言語形式に収束していく速度は日本人より遅く、新しく与えられた語にのみ注意が行き、今までの語・文の流れを忘れて、その語との関係だけで文のつながりを予測しようとする傾向が見られる」ことがわかった。そして、学習者にとって予測のために必要な能力は、「単独の、また複数の言語要素から文全体を見通す能力である」としてしている。

寺村(1987)は予測文法について、「予測能力の発揮には、語彙的知識以外に内在された文法的知識が土台になっていることは疑いないが、その文法的知識はどういうものかとなると、ある程度まで従来の文法で説明できる部分もあるが(たとえば格のフレームと述語の分類や、八など係助詞についての研究など)まだよく分からないことのほうが多い」と述べた。これを受けて、以後さまざまな予測文法の解明にむけて調査がなされた。それは文単位の予測に限らず、読解や聴解における文章単位の予測にも及んでいる。特に、寺村と市川の論文発表後に平田(1997)を中心に行われた平成8年度文部省科学研究費補助金による研究では、予測文法班による「が」と「は」の予測やモダリティ表現の予測、ニュース文聴解班による連体修飾節、テ形接続、接続助詞「が」などとの関わりからの予測、その他にも談話や長文読解における展開予測などの調査結果が報告されている。さらに、予測を読解指導に用いたり(加納 1992)、日本人の予測を学習者が産出した文の適切性判断に利用する試み(酒井 1995)など、予測を実践に生かした研究も報告されている。また、日本人が文章を読むときにどのように予測を行っているかを調べ、当該文から後続文への予測に6つのパターンがあるとした石黒(2008)の研究がある。

3. 調査の概要

3.1 調査方法

寺村の実験方法と同様の手法を用いた。つまり、ある書かれた文章から比較的長めの文を取り出し、それを文節ごとに区切って順次黒板に書き、それを見て区切りごとに予測してもらった後続の文を書いてもらうという方法である。

提示文は寺村や市村と同じく、「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと勤める人であった」(夏目漱石『こころ』より)を用いた。最初は「その先生は」で区切り、そのあとに続けて短い文を完成させるように指示する。次に、「その先生は私に」で、次にどんな文が来るか思い浮かんだらすぐに書くよう指示する。以下同様にして、文節の区切りごとに後続文を完成させるようにした。

提示文は次のように区切った。

その先生は

その先生は私に

その先生は私に国へ

その先生は私に国へ帰ったら

その先生は私に国へ帰ったら父の生きている

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと勤める

* 寺村の論文に明示されている区切りは の次は である。

* 市川の区切りは のつぎにもう一つ「 ~勤める人」がある。

3.2 被調査者

調査は城西国際大学に在籍する58名の日本語学習者に対して行った。内訳は日本語能力試験2級合格程度の中級学習者31名(中国人28名、韓国人3名)と、同じく3級合格程度の初級学習者27名(欧米人26名、中国人1名)である。因みに、寺村は大学の日本人学部生 43 名、市川は日本語能力試験1級合格程度の上級学習者 59 名に対して調査を行った。

3.3 調査項目と注意点

調査データは次の項目で集計し、寺村(日本人データ)と市川(上級学習者のデータ)に同じ調査項目がある場合はそれらの結果と比較しながら分析を行った。以降、日本人および上級学習者に関する調査結果に言及する場合は、すべて寺村(1987)と市川(1993)によるものである。

1. 「その先生は」に続く述部の形態
2. 「その先生は」に続く述部のテンス
3. 「その先生は私に」に続く述部の形態
4. 「その先生は私に」に続く述部のテンス
5. 「その先生は私に」に続く述部動詞の種類
6. 「その先生は私に国へ」に続く述部のテンス
7. 「その先生は私に国へ」に続く述部動詞の種類
8. 「その先生は私に国へ」に続く述部動詞「言う」への接続形式
9. 「その先生は私に国へ」の「国へ」の構文処理
10. 「その先生は私に国へ」は誰が誰の「国へ」か
11. 「その先生は私に国へ帰ったら」の「その先生は」に対する述語動詞の種類
12. 「その先生は私に国へ帰ったら」の「国へ帰る」「何かをする」のは誰か
13. 「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く」の「その先生は」に対する述語動詞の種類
14. 「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を」の「その先生は」に対する述語動詞の種類
15. 「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと」の「その先生は」に対する述語動詞の種類

16. 「～分けてもらえと」の解釈

ここで、データの取り扱いに関する補足説明をする。学習者の予測文は文法や語彙などの誤用や産出者の意図が不明の文などがあるが、基本的に文法・語彙選択の間違いがあっても産出者の予測の仕方が明らかなもの、産出者の意図が明らかなものはデータとして扱った。一方、意味の通じない文や述語が落ちている文などの非文も学習者の日本語レベルの特徴を現しているという観点から、産出文の総数には含めた。また、過去形の出現率は非文も含んでいる。伝達動詞とは基本的に「～と」で導かれる動詞で、伝える内容が文で表されているものを言う。「教える」も「～と教え(てくれ)た」などの形式で伝達する内容がある場合は伝達動詞として扱った。

4. 調査結果

寺村の日本人に対する調査結果、および市川の上級学習者に対する調査結果と比較しながら、区切りごとに学習者の予測のしかたを見ていこう。文中、日本人に関する記述は寺村の調査結果に基づくものであり、上級学習者に関する記述は市川の調査結果に基づくものである。また、日本人に対する調査は今から約 20 年前に実施されたものであるため、予測に関わる言語的要素以外の文化的なものは現在の様相と異なることが予想されるが、本論文ではその点は考慮しない。

4.1 区切り 「その先生は・・・」

(1) 述部の形態

「その先生は」の後にどのような文を予測したかを、述語の種類で分類すると下表のとおりである。日本人は60%の人が動詞文を、残りの40%の人が名詞文や形容詞文(形容動詞を含む)を予測しているのに対して、日本語学習者は日本語能力に関わらず、70%前後の人が名詞文や形容詞文を、残りの30%前後の人が動詞文を予測している。日本人は「その先生」の何らかの具体的な動作を予測する者が多く、学習者は「その先生」についての特徴を述べる文を予測する者が多いと言える。言い換えると、日本人の6割が既にこの段階で「その先生は」に格(この場合は主格)を予測した文を作っているが、学習者は「その先生は」だけで格を予測する人はあまりいないということになる。但し、寺村と市川が指摘しているように、指示語「その」を「あの」などに変えたり、あるいは指示語がない場合などでは、これと違った予測結果になったであろうと推測され、予測は単に「N(名詞)は」という文法的な要素だけで決まるものではなく、N(名詞)の部分にどのような意味の言葉が入るかという点も大きな影響を与えるものと思われる。

状態を表す文を予測する点は学習者に共通して言えることであるが、もう少し細かく見てみると、中級学習者は名詞文が多く、初級学習者は形容詞文が多くを占めていることがわかる。名詞文の場合は、修飾語句を伴う場合がほとんどである。これについては、日本語の学習段階と教育内容が何らかの影響を与えているのではないかと思われるが、はっきりしたことはわからない。

表1 区切り から予測された述語の種類

単位% (総文数)

	名詞+だ	形容動詞+だ	形容詞	動詞
日本人	21(9)	14(6)	5(2)	60(26)
上級学習者	30	13	30	27
中級学習者	42(13)	10(3)	16(5)	32(10)
初級学習者	22(6)	11(3)	41(11)	26(7)

* 日本人:43人、上級学習者:1級合格程度59人(国籍は不明)、中級学習者:2級合格程度31人(韓国人3人、中国人28人)、初級学習者:3級合格程度27人(中国人1人、欧米人26人)。市川(1993)では実数の表示はなく、%のみ示されている。

* 「その先生は」を題目とする複文を書いている場合は、主文の述部のみを調査の対象とした。但し、「私は」を題目とする複文を書いている場合は、「その先生は」を主語とする従属節の述部を対象とした。

(2) 述部のテンス

予測した文のテンスを見ると、学習者のほとんどが基本形(現在形)であった。これは予測文が状態性の意味をもつ名詞文や形容詞文であることと関係がある。また、60%の日本人が動詞文を予測しているが、過去形を選択した者は40%にとどまっている。

表2 区切り から予測された述語のテンス

単位% (総文数)

	基本形	過去形
日本人	60(26)	40(17)
上級学習者*	86*	14*
中級学習者	94(29)	6(2)
初級学習者	85(23)	15(4)

* 動詞を予測した者のみ

4.2 区切り 「その先生は私に・・・」

(1) 述部の形態

「その先生は」に新たに「私に」を追加して先を予測させると、日本人は全員が、学習者も90%以上の人が動詞文を作成した。「その先生は」の段階では格を予測しなかった学習者も、「私に」という二格を得ることによって格を意識した動詞文を予測することになったと言える。

表3 区切り から予測された述語の種類

単位% (総文数)

	名詞+だ	形容動詞+だ	形容詞	動詞
日本人	0(0)	0(0)	0(0)	100(43)
上級学習者	3	2	3	92
中級学習者	3(1)	7(2)	0	90(28)
初級学習者	4(1)	0	0	96(26)

(2) 述部のテンス

日本人と初級学習者の場合は、述語が動詞に絞られると、文末も過去形を予想していることがわかる。寺村の表現によると、両者は「連動している」ようである。しかし、中級と上級学習者にはこの「連動」は必ずしも発生しない。動詞を予測する割合は90%以上であるにもかかわらず、過去形を予測した者は約60%である。これはどうしたことだろうか。

おそらく過去形の出現は学習者の母語とも関係があるように思われる。上級学習者の母語は市川の論文に明記されていないので分からないが、中級学習者は中国人が9割を占めている。初級学習者は1人を除いて全てが欧米系である。本調査からは、過去形予測率は日本語能力にかかわらず、中国人学習者は欧米系学習者に比べて低いと言えよう。

表4 区切り から予測された述語のテンス 単位%(総文数)

	基本形	過去形
日本人	5(2)	95(41)
上級学習者*	37*	63*
中級学習者	39(12)	61(19)
初級学習者	11(3)	89(24)

* 動詞を予測した者のみ

(3) 述部動詞の種類

動詞の種類別に出現回数と割合を記すと、次の表のようになる。伝達行為を表す動詞は「言う」類と「求める」類に分け、前者には「言う」「話す」「助言する」など、後者には「求める」「頼む」などの動詞が属する。授受行為を表す動詞は「(て)くれる」などの授受動詞や「与える」などが属する。また、「その他」の動詞には使役動詞も含む。

表5 区切り から予測された動詞の種類 単位%(文数)

	日本人 (43文)	上級学習者	中級学習者 (28文)	初級学習者 (26文うち非文2)
伝達行為	42(18)	6	18(5)	0
「言う」類	(15)		(5)	
「求める」類	(3)			
授受行為	44(19)	53	50(14)	62.5(15)
「くれる」類	(17)		(14)	(15)
「与える」類	(2)			
その他	14(6)	41 うち使役5(3)	32(9) うち使役3(1)	37.5(9) うち使役25(6) 非文2

「その先生は私に」の次にはどんな語句がくるかを予測する場合、「N1がN2に」というガ格と二格の組み合わせの補語をとる述語をまず探すだろう。日本人は「言う」類の動詞と「くれる」類の動詞を予測する者が多く、伝達と授受動詞で全体の86%も占めている。しかし、学習者は伝達動詞を予測する者はわずかで、授受とその他の動詞が多数を占めている。その他の動詞が多いということから、日本人の予測がほぼ同様な傾向を示すのとは反対に、学習者の予測はばらばらであることがわかる。

また、予測に影響を与えるものとして、N1 と N2 の語句の意味があげられる。寺村は、日本人が高い率で「『～せよと/～するように』言う」という形で予測しているのは、「ガ格に立つのが『先生』であり、二格に立つのが『私』であることから、関係のあり方が予想されるのだろう」と述べている。このような観点から見ると、学習者は「先生」を何かを助言してくれる人ではなく、恩恵を与えてくれる人、何かをさせる人(使役)であると捉えていることが窺える。特に初級学習者に使役形が多いのは、先生に対して恩恵感情よりも、上下感情(学生に命令する存在)のほうを強く抱いているからだろうか、それとも教室指導の中でしばしば先生を主体とする使役文を提示することによる弊害だろうか。

中級、上級学習者が初級学習者と異なる点は、伝達の「言う」類動詞を使用する者が現れることと、使役文を予測する者が少ないことである。どちらの特徴も日本人の予測傾向に近づくものである。授受表現の予測は日本語のレベルを問わず多くの学習者に見られるが、授受動詞(「あげる」「いただく」など)の誤選択が目立つ。

4.3 区切り 「その先生は私に国へ・・・」

(1) 述部のテンス

一つ前の段階では過去形を予測するものが60%強であった上級学習者はこの段階で85%に上昇し、ほぼ過去形に収束している。一方、中級学習者は依然として過去形を予測する者が60%台にとどまっている。中国人の中級学習者の過去形予測率は予測される述語が動詞に収束しても、なお基本形を予測するものが3割いるという結果となっている。

表6 区切り から予測された述語のテンス 単位%(総文数)

	基本形	過去形	落ち
日本人	0	100	
上級学習者	12	85	3
中級学習者	29(9) *1	68(21)	3(1)
初級学習者	11(3) *2	89(24)	

*1 「その先生は私に国へ持ってきたお土産をやります。」など9例

*2 「先生は私に国へ何をたのしいのことを説明する」(非文)、「先生は私に国へ帰らせていただけません」、
「その先生は私に国へ行ったことがあります」の3例

(2) 述部動詞の種類

表7は区切り で予測された文の述部動詞の種類を示す。

表7 区切り から予測された動詞の種類

単位% (文数)

	日本人(43文)	上級者	中級者(31文) うち非文2、無答1	初級者(27文) うち非文3、形容詞文1
伝達行為	96	54	28.5(8)	26(6)
「言う」類			(8)	(6)
「求める」類				
授受行為	0	9	28.5(8)	35(8)
「くれる」類			(8)	(8)
「与える」類				
その他	4	31 うち使役 19	43(12) うち使役 18(5)	39(9) うち使役 17(4)

日本人は区切り 「その先生は私に」で半数が「言う」類の動詞を予測したが、その割合は区切り で96%になった。上級学習者は区切り では「言う」類の動詞はほとんど現れなかったが、区切り で54%に上った。中級学習者は区切り では18%で「言う」類を予測したが、区切り で28.5%に上がっている。しかし、日本人や上級学習者と違い、「国へ」の補語の有無が「言う」類の予測にあまり影響を与えたとはいえない。初級学習者は区切り では「言う」類動詞は現れなかったが、区切り では26%出現した。この割合は中級学習者とほぼ同じである。つまり、上級者は の段階で半数が日本人と同様の「言う」類を予測できるのに対し、中級と初級学習者はほぼ4人に一人しか予測できないということになる。

使役形を予想したものが、上級と中級では の段階より増えているのに対して、初級では減少している。上級では、5%から19%へ、中級では3%から18%へと上昇し、初級では25%から17%へと下降している。

日本人と学習者の予測の違いは授受動詞の予測にも現れている。日本人は区切り では授受動詞を44%の人が予測していたが、この段階では授受動詞は姿を消している。学習者の予測も減少しているが、依然として予測する者がおり、日本語のレベルが低いほど授受動詞の予測率が高くなっている。

(3) 「言う」への接続形式

表8を見ると、日本人が伝達動詞の前に使用する「～ように(と)」や「命令形と」(全体の69%)の形を学習者はほとんど使用しない。逆に日本人がまったく使用しない「てくださいと」や「～(よ)うと」(意向形と)を学習者は使用している。日本人が上記の二つの形式にまとまるのに対して、学習者はさまざまな形式から伝達動詞に接続している。日本語の学習段階にもよるが、「ように(と)」や「命令形と」の表現形式は日本語教育の中ではあまり重視されず、そのために定着していないと考えられよう。

表8 区切り から予測された伝達動詞に前接する形

単位%(文数)

	~ように(と)	命令形と	なさいと	~かと	てくださいと	意向形と	その他
日本人(41文)	37(15)	32(13)	12(5)	12(5)	0	0	6(3)
上級者*	26	0	16	-	32	16	10
中級者(8文)	0	12.5(1)	12.5(1)	12.5(1)	12.5(1)	0	50(4)
初級者(6文)	17(1)	0	17(1)	0	17(1)	33(2)	17(1)

* 市川(1993)では上級学習者全数を分母として割合を計算しているようだが、ここでは伝達動詞を予測した人数(全数59名中54%が伝達動詞を予測している)ので31文)の中の割合に直した。

(4)「国へ」の構文処理

日本人は区切り の段階で予測した「言う」類動詞を、「国へ」が与えられても変更せずに先送りしている。つまり、「その先生は私に国へ(帰れと/帰るように)言う」という型の文を予測している。寺村の説明を借りれば、「¹N1(人)ガ N2(人)ニ N3(所)へ」という補語から述語が検索されるのでなく、「¹N1 ガ N2 ニ」の後の予測(「言う」)はそのまま置いて先送りにし、別にN1またはN2(「その先生」「私」)が格に立つと考え、それと「国へ」との組み合わせでV3(「帰る」)を予測するというプロセスが見て取れる。そして、なぜ「N1 ガ N2 ニ」から予測された述語「言う」を先送りするかというと、「その先生は」であって「その先生が」でないからだと寺村は説明している。というのは、「何々は」は文全体を統括する主題であり、「その文が終始するまで聞き手の頭に留め置かれるものである」(寺村)からである。

単独で述語の補語となる成分を一次成分、連体修飾や連用修飾、引用などの成分を二次成分、引用の中の従属節を三次成分とすると、日本人の予測は「国へ」を「私に~と言う」という型の「~」の引用文の補語(二次成分)として「国へ帰れと言った」などとするか、「国へ帰る」を引用文の従属節(三次成分)として「国へ帰ったら~せよと言った」などとしている。つまり、「国へ」という格を「N1ガ N2 ニ」とは別の次元で処理していると言えよう。

これに対して、初級学習者は与えられた格(ガ格、二格、へ格)をすべて一次成分として処理する傾向がある。しかし、これらの格が一次成分として同時に使える述語は限られているので、ほとんどの予測文が「私に」を無視した誤用文(例えば、語順の間違い「私に国へ会いに来る」、使役動詞の補語の間違い「私に国へ帰らせる」、「ヲ格」をとる動詞を使用する間違い「私に国へ連れて行く」など)や意味不明の非文となっている。

中級学習者は「国へ」を一次成分として処理するものは少なくなっており、「私に」とは成分のレベルを変えて「国へ」を処理しようとしていることがわかる。その方法として選んだのが連体修飾と引用である。初級学習者と比べると、連体修飾としての用法が目立っている。「私に~と言う」の文が予想できなかったものは、「私に」と「国へ」が文法的に整合するように連体修飾という道を選んだと言えよう。

表9 「国へ」の構文処理

単位%(文数)

	一次成分 36(10)		二次成分 57(16)	三次成分 7(2)
中級学習者 無答・非文を 除く 28 文	(10) *1	連体修飾	句 (3) *2	
		32(9)	節 (6) *3	
		連用修飾	節 (1) *4	
		引用節	主節 (6) *5	
		29(8)		従属節 (2) *6
初級学習者 非文 3 を除く 24 文	(16) *7	連体修飾	句	
			節 (1) *8	
		連用修飾	節 (2/1) *9	
		引用節	主節 (5) *10	
		21(5)		従属節 (0/1) *9

中級学習者の例文

- *1 その先生は私に国へ帰らせない。
その先生は私に国へついて行きました。
その先生は私に国へプレゼントが持ってきた。
- *2 その先生は私に国へのおみやげをくれた。
- *3 その先生は私に国へ持ってきたものを土産としてくださいました。
- *4 その先生は私に国へ帰るときメールで復習資料があげました。
- *5 その先生は私に国へ帰りなさいと言いました。
- *6 その先生は私に国へ帰ったら日本語もちゃんと勉強しなければならないと言った。

初級学習者の例文

- *7 その先生は私に国へ会いに来ました。
その先生は私に国へ帰らせました。
その先生は私に国へ行きました。
- *8 その先生は私に国への一番安い行く方法を教えてくださいました。
- *9 その先生は私に国へ帰るためにひこうきのきっぷを買ってくれました。
その先生は私に国へ帰る時気をつけてくださいと言いました。(引用節内の従属節とも)
- *10 その先生は私に国へ帰たくないと言っていました。

(5) 誰が誰の国へ

また、「誰の国へ誰が行く」と予測するのを見ると、日本人の予測とはだいぶ違う。日本人は「私の国へ私が帰る」と予想する人がほとんどであるのに対し、初級、中級学習者は「私の国へ先生が来る」と予想する者が4分の1から3分の1程度いる(表 10)。

「国へ V」の動作主が誰かということは、その後続く動詞の選択にも影響を与える。日本人は 80%が「国へ」に続く動詞として「帰る」を予想し、「私が私の国へ帰る」という内容を予測している。初級、中級学習者は約半数が「帰る・もどる」を予想しているものの、その他さまざまな動詞を続けており、日本人のようには一様ではない(表 11)。

その原因は、「先生」が外国人かどうか、「国」が国内かどうかなど、「私」である学生が持つ文化的背景の違いが大きく影響しているからだろう。

表 10 誰が誰の「国へ」

単位% (総文数)

	私の国へ		先生の国へ		不明
	私が行く	先生が行く	先生が行く	私が行く	
中級者 31 人	39(12)*1	29(9)*2			32(10)*6
初級者 27 人	44(12)*3	26(7)*4	4(1)*5		26(7)

例文

- *1 その先生は私に国へ戻らせる。
- *2 その先生は私に国へ来て、いろいろな景勝の地を観光して、楽しんでいます。
- *3 その先生は私に国へ帰らせました。
- *4 その先生は私に国へ会いに来ました。その先生は私に国へむかえに来た。
- *5 その先生は私に国へ帰たくないと言っていました。
- *6 その先生は私に国へ旅行に行かせられます。その先生は私に国へ行きました。

表 11 「国へ」がとる動詞

単位: %

	帰る・もどる	旅行する	行く	持ってくる	その他
中級学習者 31 人	42	16	10	10	来る、ついて行く、連れて行く、各 3
初級学習者 27 人	48	4	22		来る、11 連れて行く、送る、各 4

4.4 区切り 「その先生は私に国へ帰ったら・・・」

(1) 述語動詞の種類(「その先生は」に対する述語)

上級学習者はこの段階で、日本人より一段階遅れて「言う」類動詞の予測に収束した。前段階ではほぼ同数の予測率であった中級学習者と初級学習者であるが、この段階に来て差が出ている。中級学習者は半数以上が「言う」類動詞を予測したのに対して、初級学習者は数ポイント増えた 33%どまりである。総じて、中級と初級学習者は述語の落ちや非文が多くなっていて、その数は中級が 3 割、初級が 4 割を占めている。文の構造が複雑になっており、どのように文を組み立てたらよいか迷っている様子が窺える。

表 12 区切り から予測された動詞の種類

単位% (文数)

	上級学習者	中級学習者 31(うち非文 9)	初級学習者 27(うち非文 11)
伝達行為	86	55(17)	33(9)
「言う」類		(16)	(9)
「求める」類		(1)	
授受行為	3	3(1)	18(5)
「くれる」類		(1)	(5)
「与える」類			
その他	9	13(4) うち使役(2)	7(2) うち使役(1)

(2) 「国へ帰る」「何かをする」のは誰か

「その先生は私に国へ帰ったら」の段階では、まだ誰が国へ帰るのか分からないはずであるが、日本人は全員が「私が帰る」と予測している。そして、国へ帰ってからの行動の主体も一例を除いて「私」である。中級学習者は区切り の段階で「私の国へ私が行く」と予想した割合が 39%、「私の国へ先生が行く」が 29%であったが、区切り の「国へ帰ったら」の段階では、「私の国へ私が帰って何かをする」と予想する割合が 50%を占め、先生が行動の主体として現れる割合は少なくなっている。

初級者の発想は区切り の段階になっても、与えられた情報に影響を受けずにより自由な発想で先を予測している。日本人が描く「先生」と「私」のイメージとは確実に異なっていて、「先生が帰って、何かをする」と予想したものが依然いる。意味関係があいまいな文や非文が増えてきており、与えられた文の一部からその先を予測した内容を的確に表現するだけの構文力に限界が感じられる。

国へ帰ったら何をするのか。日本人の予測した内容は「日本人なら誰でもこの文脈で思いつきそうな行動」(寺村)である。「国」の意味が「両親のいる生まれ故郷」という意味なので、例えば、親孝行をする(5例)、両親の世話(2例)、親の元で暮らす、親に甘えてくる、仕事を手伝う、すぐ両親に会う、母さんの肩をたたく、お墓参りする、就職する、勉強する、手紙・はがき・電話をよこす(7例)、お土産を買ってくる、といった内容を予測している。

それに対して、初級、中級学習者は「国」の意味を日本に対する自国と捉えているので、予想する行動も日本人とは異なる。多かったのが、連絡する、頑張る、電話する、お土産を買う、などであった。このように予測はその人が置かれている環境や文化などの言語外知識によっても左右されるものであるということがわかる。

表 13 「国へ帰る」「何かをする」主体

単位% (文数)

	私が帰る		先生が帰る		不明
	私がする	先生がする	先生がする	私がする	
中級学習者	52(16)*1	9(3)*2			39(12)
初級学習者	33(9)*3	11(3)*4	4(1)*5		52(14)

< 例文 >

- *1 その先生は私に国へ帰ったら電話してくださいと言いました。
- *2 その先生は私に国へ帰ったらオリンピックの記者になる面接を指導します。
- *3 その先生は私に国へ帰ったら日本語をもっとべんきょうしなさいと言いました。
- *4 その先生は私に国へ帰ったらさびしくなると言いました。
- *5 その先生は私に国へ帰ったら早くカラオケに行きたいと言っていました。

4.5 区切り 「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く・・・」

(1) 述語動詞の種類(その先生はに対する動詞)

中級学習者は伝達行為の出現が区切り の段階の55%から59%に、初級学習者は33%から41%に上昇した。依然として「その先生は」に対する述語の落ちや非文が多く、構文挫折に陥っている様子が窺える。

表 14 区切り から予測された「その先生は」に対する動詞の種類 単位%(総文数)

	伝達行為	授受行為	使役動詞	その他	非文・落ち	無答
中級学習者 31(非文、無答を含む)	59(18)		6(2)		32(10)	3(1)
初級学習者 27(非文を含む)	41(11)	18(5)	4(1)	4(1)	33(9)	

4.6 区切り 「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を・・・」

(1) 述語動詞の種類(「その先生は」に対する動詞)

伝達動詞の予測率は、初級、中級学習者とも前段階より少し落ちてはいるが、大差はない。

表 15 区切り から予測された述語の種類 単位%(総文数)

	伝達行為	授受行為	使役動詞	その他	非文・落ち	無答
中級学習者 31(非文、無答を含む)	55(17)	3(1)	3(1)		32(10)	7(2)
初級学習者 27(非文を含む)	37(10)	11(3)	19(5)		33(9)	

4.7 区切り 「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと・・・」

(1) 述語動詞の種類(「その先生は」に対する動詞)

中級学習者はこの段階で77%が伝達動詞を予測しており、ほぼ一つの種類の述語に収束し始めていると言える。初級学習者は約半数の13文が非文や無答であり、伝達動詞の予測も区切り 以来あまり変化がない。

表 16 区切り から予測された動詞の種類

単位% (総文数)

	伝達行為	授受行為	使役動詞	その他	非文・落ち	無答
中級者 31(非文、無答を含む)	77(24)				19(6)	3(1)
初級者 27(非文、無答を含む)	37(10)	7.5(2)	7.5(2)		37(10)	11(3)

(2) 「分けてもらえと」の解釈

初級、中級学習者は「分けてもらえと」を引用ではなく、「分けてもらうと」「分けてもらったら」という条件の意味に解釈している学習者が目立つ(表17)。「と」の意味が引用だということを正確に解釈できれば、それに続く言葉は「言う」類が出るはずだが、「と」を条件の接続助詞と誤解している例がめだつ。

しかし、次の例のように誤解していてもその後にはわざわざ「と」で導く内容を補って「言う」類の動詞で文を結んでいる中級者がだいたいいる。

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと有意義なことをしなさいと言いました。(学習者13)

これを考えると、中級学習者の持つ文法体系の中には、条件「と」が「言う」を予測させる何らかの要素を持っているのではないかと考えられる。学習者の産出文を見ると、「その先生は私に～すると…だと言った」の構文になっているものが多い。中級レベルでは「(国へ帰っ)たら」という条件節よりも、「(財産を分けてもら(う))と」という条件節のほうが「言った」を予測しやすいのかもしれない。すなわち、「その先生は私に～したら」よりも、「その先生は私に～すると」のような形式のほうが「言った」を予測しやすくなる何らかの文法知識が働いているのではないだろうか。一方、上級学習者は前者の「(国へ帰っ)たら」の段階で「言う」類動詞に収束しており、日本人の予測に近づいている。

「と」を引用と解釈できなかった理由の一つは、「もらえ」という活用形(命令)にあるように思う。「命令形+と」の用例をあまり見かけないことが、「と」を引用ではなく条件の意味だと誤解させたのではないが、「もらえと」を「もらうと」のように理解したようである。なかにはわざわざ「もらえと」のように「る」を補って予測している学習者もいる(「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと学費を支払うことができますって言った。」学習者5)。このように、日本語学習者の場合にはたった一つの文法知識の不足によって思わぬ方向へと解釈が進んでしまうことになりかねない。

表 17 「分けてもらえと」の解釈

単位% (総文数)

	引用	条件	順接	不明
中級 31人(うち無答1)	45(14)	52(16)		
初級 27人(うち無答3)	26(7)	48(13)	(1)	(3)

5 . 考察

本節では前節に述べた調査結果を踏まえて、日本語学習者の各レベルの予測能力の特徴に光を当て、そこから見えてくる日本語習得過程についてまとめてみたい。また、学習者が日本語の文を予測する際に、日本語の文法知識以外に、どのような要素に影響されるのかについても考察する。

5 . 1 学習者の予測能力と日本語習得過程

日本人は「その先生は私に」と聞いただけで半数が、さらにそこへ「国へ」を付け足すとほぼ全員が「言う」類動詞を予測して、その予測を文の最後まで先送りしている。つまり、日本人は「国へ」が出たとたんにこの文を複文と予測し、しかも引用節の複文として「言う」類の述語を予測し、さらに「その先生は私に～言った」という文構造を最後の予測段階まで一貫して維持したということである。ここでは日本人の予測に現れたこれら三つの特徴、複文予測、「言う」などの伝達動詞の予測、「言う」類動詞の先送り、から学習者のレベル別特徴を整理してみよう。そのことはまた学習者の日本語習得プロセスを示すものであり、日本語能力のレベルを判断する一つの指針となるだろう。

5 . 1 . 1 複文予測

表18に区切りにおける「国へ」の予測の仕方の違いを示す。日本人は「国へ」を伝達動詞「言った」の引用節として二次成分または三次成分として予測した。つまり、「国へ」という格を「N1が N2 二」とは別の次元で処理し、この文を複文と予測したのである。これに対して、初級学習者は与えられた格(ガ格、二格、へ格)をすべて一次成分として処理したものが67%で、そのほとんどが誤用文や非文となっている。複文と予測できたのは33%である。一方、中級学習者は「私に」と「国へ」を一次成分として処理するものは初級者の約半分に減少しており、複文予測率が上昇している。しかし、興味深い点はこの段階で「言う」などの伝達動詞を予測できなかったものが、「国へ」を引用節としてではなく、連体修飾句・節として予測している(32%)ことである。初級学習者で「国へ」を二次成分として予測した者のうちの29%が引用節としてであり、連体修飾節としたものは4%に過ぎない。つまり、伝達動詞を予測できなかった場合は「国へ」をすべて一次成分として処理することになる。このことを考えると、中級学習者は伝達動詞を予測できなかった者でも「国へ」を一次成分として誤用や非文にするのではなく、「私に」と「国へ」が文法的に整合するように連体修飾という道を考えられるほど文法力を習得していると言えよう。

表 18 区切りにおける「国へ」の予測

	日本人	上級学習者	中級学習者	初級学習者
一次成分			36%	67%
二次成分以上	(96%)	(54%)	64%	33%

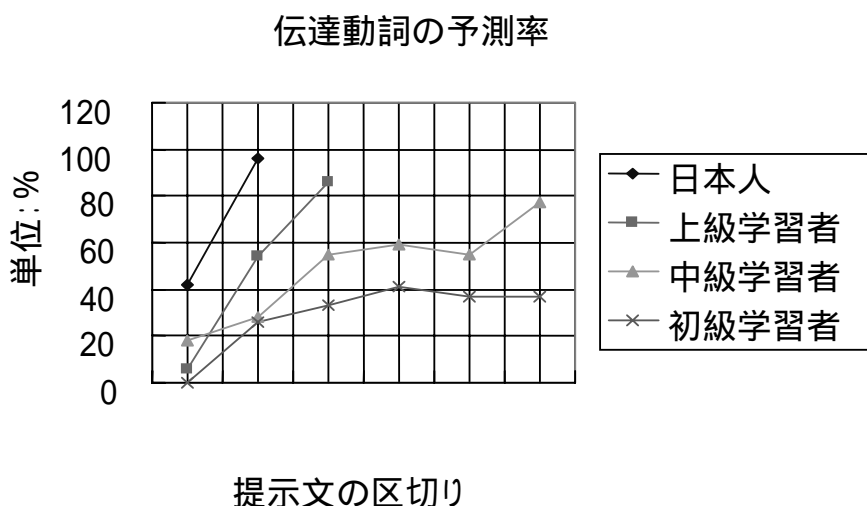
*日本人と上級学習者は()内に伝達動詞を予測した割合を示した。

5.1.2 伝達動詞の予測

学習者は提示文のどの区切りでほとんどの人が「言う」類などの伝達動詞を予測するようになるのだろうか。伝達動詞を予測した学習者の割合を区切りごとにまとめたものが図1である。

上級学習者は区切り「その先生は私に国へ帰ったら」の段階でほとんどが伝達動詞に収束している。一方、中級学習者は区切り「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと」でやっと80%近い人が伝達動詞を予測する。初級学習者は収束することはない。このある一つの動詞の種類に収束する速度が日本人に近いほど日本語能力が上達していることを示していると言える。

図 1 伝達動詞の予測率の推移



伝達動詞を予測する人の割合が増加しない理由の一つは、もともと伝達動詞を予測しない人が多いからである。中級レベルでは伝達動詞を1度も予測しない学習者も4人いる(学習者10, 19, 21, 28)。また、かなりできる者でも、なかなか「言う」類動詞を予測しない。例えば、学習者3と9は区切り「～父の生きているうちに財産を」でやっと「言った」を予測している。それ以前の段階でも文法的には正しい文を予測しているが、この段階までは伝達動詞を予測しなかった。二人は中級学習者のなかでもレベルが高いほうであるが、それでも日本人や上級学習者の伝達動詞を予測する速度とはかなりかけ離れていることが分かる。単に文法を正しく理解しているだけでは、予測が日本人のそれに近づくとは限らないことがわかる。

5.1.3 伝達動詞の先送り

日本人は「その先生は私に国へ」で「言う」類動詞を予測したら、そのあとにどんな言葉が追加されてもこの「言う」類動詞を先送りする形で文を予測しているという。それは日本人が「その先生は」の係助詞「は」には文全体を統括する力があることを無意識に知っているからということも理由の一つであろう。上級者は殆どの方がその一段階後の「その先生は私に国へ帰ったら」で伝達動詞を予測しており、その約半数が「言う」類動詞を

先送りしている。しかし、残りのものは語句を得るごとにそれに続く述語の言語形式がかわる。では、中級学習者はどうだろうか。

中級学習者はやっと区切り で 77%が伝達動詞を予測しており、収束速度も収束率も上級学習者に比べてかなり低い。実は伝達動詞に収束する区切り 以前に既に伝達動詞を予測するものも多いるが、新しい語句を与えられるごとに述語を変えてしまうものも多い。このことが収束を遅らせている一因ともなっている。

では、なぜ先送りしないのだろうか。その理由の一つは、「言う」類動詞の予測を先送りできるほど、強固な予測構文を描けないということが挙げられよう。例えば、学習者6は次のような予測文を書いている。

その先生はやさしいけど、おこる時はこわくなる。

その先生は私に「1級試験なんか君もできるよ、がんばって」と言いました。

その先生は私に国への路線を案内してやりました。

その先生は私に国へ帰ったら連絡してもらうように言いました。

その先生は私に国へ帰ったら父の生きていることに確認して教えるように言いました。

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く見に行って和解しなさいと言いました。

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を(なし)

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえとぜひ彼にごちそうするとそう約束しました。

この学習者は で「言った」を予測していながら、 で「国へ」が与えられると違う構文を予測し、再び で「言った」構文に戻っている。そして、 とその構文を先送りするが、 で「財産を」が与えられてからは「言った」構文が予測できなくなっている。なぜ で「言う」が途絶えるのだろうか。おそらく「国へ」が与えられると、その格を「私に」の格とともに一次成分として捉える予測が強く働いたからであろう。日本人の殆どがこの段階で「国へ」を二次あるいは三次成分へとシフトして、「その先生は私に」に対して「言う」類動詞を予測したのとは異なる。

述語の予測を先送りしない理由の二つ目は、先に提示された語句(「その先生は私に」)を忘れてしまって、文全体の構成を考えずに目先の語句に左右されるからと考えられる。市川の指摘するように、「新たに付け加えられた語句に注意が行き、今までの文の流れを忘れて、その語との関係だけで文の続きを予測しようとする」からである。

例えば次の学習者 11 の予測文を見ると、 では「言う」構文にしたが、それ以降の段階ではすべて「言った」を落としてしまっている。「その先生は私に」で始まる文であることがすっかり記憶から抜けている予測になっている。

その先生は面白い人です。

その先生は私にお菓子をくれました。

その先生は私に国へつれて行くと言われた。

その先生は私に国へ帰ったら連絡をください。

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているとき、一番行きたい所を聞いてください。

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く有名人になってください。

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を調べたほうがいい。

その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けてもらえと人を助けることができるよ。

5.2 予測を左右する言語知識以外の要素

文の続きを予測する場合、予測に影響を与えるのは学習者の文法知識のみに限らないようである。今回の調査では学習者の母語、学習者の環境、学習指導内容や方法なども関わっているのではないかと思われる調査結果が得られた。

まず、母語の影響が疑われる事象は述部のテンスの予測に現れている。区切り では日本人だけでなく全レベルの学習者が動詞を予測しているが、その中で述部が過去形に収束するのは日本人と初級学習者だけである。上級学習者と中級学習者にはこの動詞と過去形の「連動」は見られない。これは、上級学習者の母語は市川の論文に明記されていないので分からないが、中級学習者の9割が中国語母語話者であるのに対し、初級学習は一人を除いて全てが欧米系母語話者であることと関係があるのではないかと思われる。区切り になっても、中級学習者の過去形予測率は60%台にとどまっている。過去形予測率は日本語能力にかかわらず、学習者の母語が影響していると考えられる。

学習者の置かれた環境が予測に影響を与える事例は、区切り 「その先生は私に国へ」で「誰の国へ誰が行くのか」、区切り 「その先生は私に国へ帰ったら」で「誰が国へ帰って何をするのか」などの内容予測に現れている。日本人は「私の国へ私が帰る」「私が両親のいる生まれ故郷に帰って親孝行などの日本人なら誰でもこの文脈で思いつきそうな行動をする」と予測する。それに対して、学習者は日本人の予測のように一様ではなく、「私の国へ先生が来る」「先生が帰って、何かをする」「私が自国に帰って頑張る/先生に連絡する」などさまざまな内容になっている。その原因は、「先生」が外国人かどうか、「国」が国内かどうかなど、「私」である学生が持つ文化的背景の違いにある。このように予測はその人が置かれている環境や文化的背景などの言語外知識によっても左右されるものであるということがわかる。

最後に学習指導上の影響であるが、これは学習者が「言う」の前に「～ように」や「命令形＋と」という形式をほとんど用いないこと、また、区切り 「～早く財産を分けてもらえと」の「もらえと」を引用(中級学習者45%、初級学習者26%)ではなく条件と解釈する者が多い(中級学習者52%、初級学習者48%)ことなどから窺える。これらの「言う」への接続形式や命令形などは学習指導の過程で充分に取り扱われていない可能性が考えられる。

学習指導上の影響が現れたもう一つの事例は、日本人には予測されなかった使役文が学習者には多く予測されていることである。授受文だけではなく使役文も多く予測される背景には、教室学習の中で使役文を導入・練習する際に、「先生が学生にさせる」という例文を多く使うせいではないかとも推測される。

6 . おわりに

寺村に始まった日本人の文の続きを予測する能力についての調査は、市川の上級日本語学習者の予測能力調査へと引き継がれ、今回、初級、中級日本語学習者の予測能力調査へと展開した。寺村と市川の調査を引き継いで行なった結果、各日本語レベルの予測の特徴が浮き彫りになるとともに、学習者の日本語習得過程の一端が覗けたように思う。

最後に、各レベルに現れた予測能力の特徴を学習者のレベル判定に役立てられないかということについて一言述べたい。一文の予測結果のみからその学習者の日本語レベルを判定するなどということは無茶なことであろうが、あえて今回の調査結果を踏まえて、レベル判定の道筋を付けてみようと思う。

まず、最初のレベル判定のポイントは、「その先生は私に国へ」を与えたときに、「国へ」を一次成分とするか、あるいは二次成分として文を組み立てられるかということであろう。一次成分とした場合は初級レベル、二次成分とした場合は中級以上ではないかと推測できよう。そして、次のポイントは「国へ」を引用節とするか、連体修飾句・節とするかである。連体修飾として処理したら中級レベルの可能性もある。もし、ここで「言う」類に代表される伝達動詞の引用節を予測できれば、より高度な予測能力があると判断される。さらに、「国へ帰ったら」という言葉を与えたときに、そのまま伝達動詞を先送りして、文の構造を保持できるかどうかの問題である。伝達動詞の先送りできた者は入れ子型の文構造がしっかり把握できていると判断できるので、上級レベルではないかという推測ができよう。このように、予測結果は学習者の日本語習得度を表すものだと捉えた場合、それをレベル判定などに応用できる可能性が見えてくる。

寺村の述べるようにネイティブスピーカーの頭の中には「補語との結びつき方によって述語のタイプが仕分けされて入っている」と言えよう。言葉を聴いたり読んだりするときは、最初から順番に言葉が入ってくるので、その順番にどんな文になるのかを予測しながら理解していることになる。一度に全部の文が与えられる場合とは異なり、少しずつ与えられて理解しなければならないときには、与えられた単語とその格の組み合わせからあり得る述語を予測しながら文を組み立てていかなければならない。

しかし、学習者が普段日本語を学習するときには文全体が見える状態で、しかも「どの動詞はどの補語を取るか」というように習う。しかし、実際に言葉を理解する状況は「この補語をとるのはどの動詞」という逆向きの順番になる。このように考えると、日本語の教育現場でも常に文全体が見える状態ではなく、逆向きの学習で理解力の訓練を図ることも必要なのではないかと考える。例えば、文全体を与えて()に助詞を入れさせるような練習問題がよくあるが、そうではなく、いくつかの名詞と助詞の組み合わせから次にくる動詞や文構造を予測させたりする練習などである。このような予測能力を活性化させる学習方法により、学習者はより実践に近い形で日本語の練習ができるようになるのではないかと考える。

【参考文献】

石黒圭(2008)『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房

市川保子(1993)「外国人日本語学習者の予測能力と文法知識」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8

加納千恵子(1992)「読解指導の方法と過程 接続詞による予測・推測を利用した指導例」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』7

酒井たか子(1995)「文の適切性判断のための一試案 後続文完成問題における日本人との比較」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10

寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法知識」『日本語学』6 - 3 明治書院

平田悦朗(1997)『日本語学習者の文の予測能力に関する研究及び読解力・聴解力向上のための教材開発』平成8年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告

Prediction Capability and Grammatical Knowledge of Japanese Learners :

Focusing on Japanese Proficiency Levels and Japanese Acquisition Process

Yasue Hara

Abstract

This study aims to describe how basic and intermediate Japanese learners predict and complete a sentence when given the phrases of a certain sentence one by one. It also aims to clarify how prediction capability of Japanese learners develops, which indicates Japanese acquisition process.

This experiment was originally performed by Teramura (1987) for Japanese native speakers. First, the experimenter writes the first phrase of a sentence and ask the subjects to predict the following and complete a sentence. Then, the experimenter gives the second phrase to the subjects and asks them to predict and complete a sentence. This routine continues until the last phrase of a sentence is given. The sentence used is; *sono sensei wa/ watashi ni/ kuni e/ kaettara/ chichi no ikiteiru/ uchi ni hayaku/ zaisan wo/ wakete morae to/ susumeru/ hito de atta.*

Japanese native speakers predict reporting verbs such as “iu” when the third phrase “kuni e” is given (Teramura 1987) and advanced learners do the same prediction when the fourth phrase “kaettara” is given (Ichikawa 1993). On the other hand, it is when the eighth phrase “wakete morae to” is given that most intermediate learners predict reporting verbs, and predictions of basic learners never come together as one type of verbs. The higher the Japanese proficiency level is, the earlier learners predict one type of verbs.

Japanese native speakers predict a complex sentence when the third phrase “kuni e” is given, but 64 percent of intermediate learners can expect a complex sentence when the third phrase given. About a half of those expect not a quotation clause but an adnominal phrase or clause. It means that even those who cannot predict the same sentence structure as Japanese native speakers do can avoid producing grammatically incorrect sentences by predicting a complex sentence containing an adnominal phrase or clause. On the contrary, 67 percent of basic learners cannot predict a complex sentence on this stage and produces a grammatically incorrect sentence. The higher the Japanese proficiency level is, the earlier learners predict the sentence structure.

Prediction is affected by other factors than knowledge on Japanese language, which are the learner’s native language and living environments, and the Japanese teaching contents and methods that learners received.